

145 ひあめづかこふん 火の雨塚古墳



指 定 市 史 跡 昭和25年12月1日
 所在地 桑 山
 所有者 寺尾 福丸



御牧原台地南東の寺尾山南山腹にある、直径約10m、高さ約3.5mの円墳で、南に羨道せんどう（長さ約1.65m、幅約0.9m）があり、奥の玄室へ通じている。玄室は、奥行きが約2.7m、幅が約1.4mで、中央部がやや広く造られている。

これが火の雨塚古墳の形状だが、これ以上は今わからない。ただ、『佐久口碑伝説集』北佐久編に、関今朝一氏の次の話がのっている。

今からおよそ400年ばかり前の中山道が開かれない頃、浅科村桑山の部落は、寺尾山の日当りのよい所にあつて、その戸数もわずか14・5軒に過ぎなかった。丁度その頃、浅間山が大噴火をして、この辺まで溶岩や熱灰が落下してあたたかも火の雨がふるような有様で、土地の人達は逃げることも出来ないのので、皆あわてて洞穴を造ってその中に逃げ込み難を避けたという。その時の洞穴がこの火の雨塚であるということである。

一説はむかし武烈天皇が大変に横暴な振舞を常にされたので、天の神様がこれを見て大いに怒つて、これを懲しめてやろうと火の雨を降らした。この土地（桑山）の人びとはこの災難に苦しんで難をさけようと洞穴を造って隠れたといい、その洞穴がこの火の雨塚であるという。

火の雨塚古墳について、二つの伝説があることがわかる。